

## 東日本大震災9年

# 大川小から命の授業 遺族の元教諭、オンラインで全国へ 知って、未来変えられる

毎日新聞 2020年3月12日 東京夕刊



被災校舎（奥）が残る旧大川小から授業を届ける佐藤敏郎さん（左）＝宮城県石巻市で2020年3月11日、和田大典撮影

東日本大震災で児童・教職員84人が犠牲になった宮城県石巻市の旧大川小学校で11日、元中学教諭で児童遺族の佐藤敏郎さん（56）がオンラインで「命の授業」を届けた。画面越しに学んだのは新型コロナウイルスの感染拡大防止のため休校中の全国の子どもたち。佐藤さんは被災した教室や校庭から「災害は止められないが、何十万人が命を落とす未来は変えられる」と語り、あの日の大川小から共に学ぼうと呼びかけた。

佐藤さんは、校舎2階の6年生教室からスマートフォンを使って授業を始めた。ちょうど9年前、次女みずほさん（当時12歳）が学んでいた教室。穏やか

な口調で「みんなと同じくらいの子どもたちがあの日まで、ここで笑っていたことを知ってほしい」と語りかけた。避難すれば助かったはずの近くの裏山にも向かい「怖いのは津波ではなく『ここは大丈夫』と油断すること」と強調した。

授業は、宮城県女川町など被災地で教育支援に取り組むNPO法人「カタリバ」（東京）が企画。休校で長時間家にいる子どもの居場所づくりやストレス緩和のため、インターネット上のサービス「カタリバオンライン」を4日に始めた。英会話やヨガの授業のほか、朝夕には大勢でおしゃべりする時間も設けている。佐藤さんはカタリバのアドバイザーを務めており、11日は大川小から発信することにした。

命の授業には北海道や東京都、宮崎県など全国約40世帯の小中高生らが参加。茨城県つくば市では、小学5年の鈴木結太郎さん（11）と弟で2年の直紀さん（8）がリビングでパソコンの画面をじっと見つめた。

佐藤さんが「2階の天井まで津波の跡が来ています」と生中継すると、2人は「え、やば」と驚きの声を上げた。3時37分で止まった時計が映し出されると、結太郎さんは「その時に津波が来たんだ」とつぶやいた。

震災当時2歳だった結太郎さんは「知っておかないといけないと思う。いつか同じようなことが起こるかもしれないから」と心から受け止めた様子。一緒に聴いた母紗世さん（35）は「今日見聞きしたことは将来、2人にとって人生の大きなきっかけになるかもしれない。いつか思い出してもらえたら」と願う。

佐藤さんは「実体験のない世代の子どもたちにも知ってもらえる機会になったと思う。教室は本来学ぶ場所。ここで9年ぶりに授業をできたことに意味がある」と語った。【尾崎修二、百武信幸】

---

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.